

1 学校の状況と地域の実態

- (1) 創立145周年を迎えた本校がある古くからのまちに代々住む住民と、近年開発された大型マンションに移り住んできた新しい住民との2極の地域であるが、地域としてはお互いを受け入れまとまりのある地域となっている。
- (2) 地域は過去の子どもの荒れに対応した取り組みが続いており、自治会・町内会・子ども育成会が地域として、子どもを見守り育てていく意識が強くある。
- (3) 子どもたちの一日の家庭の勉強時間については、塾での学習を含め差が極端になってきている。PTAによる読書座談会など、地域ぐるみの取り組みがあるにもかかわらず、家庭における学習環境が十分には整っていない家庭も増えている。
- (4) 学習や生活の中で特別な支援を必要とする児童が増えており、児童支援専任や特別支援コーディネーターによる組織的な支援体制の強化が課題である。
- (5) 区AB研、市研、校内重点研究などを中心とした教員の研究・研修は定着している。仮説を位置付けたテーマに即した研究活動や、ケーススタディの充実により、教師力の向上が期待される。
- (6) 若い職員が多く、活力ある職員集団である。経験は浅いが、その分伸び代が期待できる職員が多い。
- (7) 児童の急増によるに対応した工事も終わり、新しい校舎やグラウンド、プールが完成した。しかし、児童の増加は今後更に加速し、平成31年度で収容限度に達する。そのため、32年度に第2方面校を開校できよう、その在り方を含め、行政、学校、保護者、地域で話し合いを重ねている。

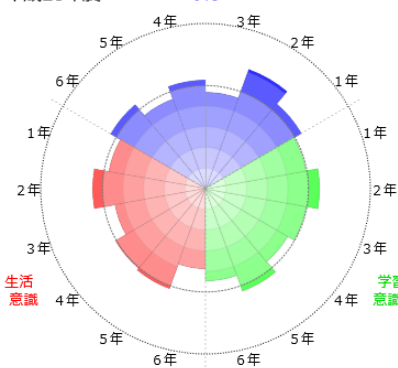
2 今後3年間の方向（中期学校経営方針）

(2) 学力向上に関する指導の目標・方針（平成30年度末の姿）

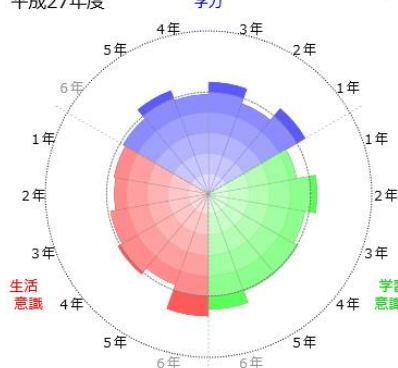
- 市場小スタンダードの定着により学ぶ姿勢の基礎基本が定着しています。
- 低学年では、生活科を中核とし、「人・社会・自然」とのかかわりの中で、主体的に活動に取り組む姿が見られたり、自分の言葉で気付きを伝えようとしたりする姿が見られるようになった。
- 中学年、高学年では、理科を中核とし、問題解決学習を通して学習の流れを理解し、科学的な根拠をもって予想や考察を考えることができるようになってきた。
- すべての学級において安定した授業ができる指導技術を教師が身に付け、特別な支援が必要な子どもたちにも適切な支援を行っています。

3 横浜市学力学習状況調査等からの平成29年度の実態把握

平成28年度



平成27年度



(1) 学力の概要と要因の分析

学力については、若干ではあるが標準を上回る学年が増えてきている。市場スタンダードの定着や、基礎基本の定着、分かる授業の展開という教師側の努力もあるが、保育園、幼稚園からの積み重ねや、家庭での学習環境の変化等、外部によるところも大きいと推測できる。

(2) 教科学習の状況

- ・ 中学年・高学年においては、総じて理科の学力が前年度より上がっている。
- ・ 国語の学習においては、どの学年も前年度より下回っている。

(3) 経年変化の状況と要因の分析（学習・生活意識調査も含めて分析）

- ・ 学力以上に学習・生活意識がより課題が大きかった24・25年の結果を受け、「自己有用感を体得させ、自尊感情や自己肯定感の高まりから自らを高める子」を、目指す子ども像として共通理解し取り組んできた。結果、一部の学年を除く今年度の学習・生活意識の高まりにつながっていると考える。
- ・ 学力に関しては、伸びた教科と低下した教科が見られた。「伝え合い・学び合い」という重点目標を意識しながら、学力に伸びが見られた理科の学習を核とし、各教科の学習と関連付けながら学習を進めていけるようにする必要がある。

4 平成 30 年度 重点研究目標と具体的方策

平成 30 年度 目標

「伝え合い・学び合いの中で、自分の考えを深めていく子の育成」

(1) 学校組織としての共通の取組

- 「伝え合い・学び合い」の重視
子どもたちが、自分たちで問題を見つけ、解決する方法を考えていくことができるように、子ども同士の伝え合い・学び合いを授業の中で大切にする。
- 特別支援教育の充実
中部療育センターと連携し、年間を通したコンサルテーションを実施して具体的な支援に結びつける。また、通級指導教室の機能を活用し実践と指導力向上を結びつける。研修やケーススタディを複数回実施し、職員全体の対応力を向上させる。
- 研修・研究会の時間の確保と内容の充実
スケールメリットを生かし、学年研を一番の研究研修の場とする。
常に問題意識、改善意欲をもち、どのような集団・組織においても子どもの話題を大切にする。

(2) 学年・教科等としての取組

1 学年

- ・半具体物や具体物を用いた活動を通して、学び方を身につける。
- ・計算タイムや家庭学習などを通して、繰り返し学習することで、学習内容の定着を図る。
- ・生活体験の中から学習財を取り入れ、興味・関心・意欲を高める。
- ・話す力や聞く力を見につけ、言語活動の充実を図る。

3 学年

- ・諸感覚を働かせて、観察、実験などを行うようにし、実感を伴った理解ができるようにする。
- ・伝え合いの場面では、自然の事物、現象の差異点や共通点に気付いたり、比較したりしたことを表現できるように語彙を豊かにする。
- ・生活経験や学習経験を基に、観察したり、実験結果をまとめたりすることができるようにする。

5 学年

- ・単元における出会い→問題→予想・仮説→結果→考察までの流れを意識したノート作りを徹底する。
- ・身近な場面から考えの根拠となるものを見つけ、生活と関連付けながら科学的な見方を培えるようにする。
- ・「知識・理解」の観点の向上に向け、正しい理科学的言語を用いて、自分の考えを伝え合うことができるようにする。

○伝え合い・学び合いを深めていくために

2 学年

- ・教材との出会いを工夫し、いろいろな対象に興味・関心をもって主体的に関わることができるようにする。
- ・話し方、聞き方のモデルを示し、実践することにより自分の思いを伝える力を身につけられるようにする。
- ・読み書き計算の反復練習をし基礎学力の定着を図る。
- ・人やものとの関わりを通して、自分のよさや成長に気付くことができるようにする。

4 学年

- ・自分の思いを伝えたい、分からないことを追究していきたいという子ども達の思いを大切にしていく。
- ・そのために、自分たちで実験方法についても考えていく場面をもつようにする。
- ・知識、理解の定着を図るために、既習事項を掲示していくようにする
- ・正しい理科学的言語を用いて自分の考えを表現できるようにする

6 学年

- ・興味・関心をもって問題を追及できるように、教材との出会いを大切にする。
- ・子ども一人ひとりの考えの共通点や相違点を明確にしながらか話し合い、より確かな科学的な見方や考え方ができるようにする。
- ・自分の仮説をもったり、実験結果と照らし合わせて考えたりするために、ノートに問題解決の過程を整理できるよう指導する。

個別支援学級

- ・児童の興味・関心や生活的な目標、課題等を考慮し、学習内容を選択する。
- ・他教科や他領域との関連も図りながら指導を計画する。
- ・具体的・体験的な学習活動を大切にする。